

喰うか喰われるか? (前編)

——ラテンアメリカをめぐる「喰人」表象の変遷に関する一考察——¹

後 藤 雄 介

【目 次】

はじめに

1. 「喰らう」ラテンアメリカ——コロンブスから「アメリカ学派」まで
2. 「喰われる」ラテンアメリカ——キャリバン化する米国に抗して
 - (1) 物質主義の脅威
 - (2) 精神性の逆襲

[以下, 後編予告]

3. ふたたび, 「喰らう」ラテンアメリカ
 4. 拡散する「喰らう」ラテンアメリカ
- むすび

はじめに

「喰人」は, ひとの飲食行為のおよそ究極の形態であり, かつ, 野蛮の象徴の最たるものであろう。喰人に相当する西欧語 (ここでは便宜的に英語を採用) は「アントロポファギー (anthropophagy)」または「カニバリズム (cannibalism)」である。このうち後者のカニバリズムは, その生成において「アメリカ」²と深く結びついている。本稿の目的は, 喰人にまつわる表象を, アメリカもしくはラテンアメリカをめぐる展開された他者理解と自己認識とが交錯する地平に位置づけ, その歴史の変遷の持つ意味合いについて考察するところにある。

アメリカの喰人表象を検討するにあたって欠かせないのが, ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の最後の戯曲『テンペスト』(1611)³に登場するキャリバン (Caliban) の存在である。キャリバンの由来については諸説あるが, 喰人種を意味する「カニバル (cannibal)」のアナグラムであるとの説が有力である。それが『テンペスト』という物語をアメリカに接続させるのであり, 本稿もまたキャリバンに注目する所以である。

近年のポストコロニアル思潮下にあつて, 文学上の「正典」を^{キャノン}批判的に読み直し, それを持つ

従来の規範^{キヤノン}を脱構築する試みが盛んにおこなわれている。シェイクスピアの作品群についてもその例外ではなく、とりわけ『テンペスト』において顕著である⁴。キャリバンについていえば、喰人種のステイグマをあらかじめ背負わされているにもかかわらず、これをアメリカの植民地的状況におけるサバルタン（被抑圧者階級）のシンボルとして積極的にとらえるのはいまや常識的でさえある⁵。そのひとつの例は、キューバのロベルト・フェルナンデス・レタマールの「キャリバン——われらのアメリカにおける文化議論に向けた覚書——」（1971）のなかに見いだすことができる。

われわれのシンボルは……むしろキャリバンである。このことは、キャリバンもかつて住んでいたこれらの島々〔カリブ海諸島を指す——補足後藤。以下同様〕の住民たるわれわれ「メスティーン」⁶にとっては、とりわけ明らかである。プロスペローが島々を侵略し、われわれの祖先を殺し、キャリバンを奴隷とし、そして意志疎通ができるようキャリバンに言葉を教えた。……キャリバンの歴史・文化でなくして、なにがわれわれの歴史・文化であろう？（Fernández Retamar 1989: 14）。

こうした現在のポストコロニアル的主体にまで至るキャリバン像の歴史の変遷については、すでにアルデン・T・ヴォーンとヴァージニア・メーソン・ヴォーンが大作『キャリバンの文化史』〔原題『シェイクスピアのキャリバン』〕（ヴォーン&メーソン 1999）のなかで詳細に跡づけている。また、ポストコロニアル的主体認識に立脚したシェイクスピアの脱構築的研究も今日ますます広がりを見せている⁷。

本稿は、ポストコロニアル的主体認識に至るキャリバンの足跡を中心に、あくまでも「喰人」に焦点を絞り、その表象のあり方を代表的な言説のなかで検討してゆくことにする。そのなかで見えてくるのは、アメリカをめぐる「喰らう」／「喰われる」ものとしての主体／客体が、意味合いを変容させながら交代する様である。

第1節ではまず、コロンブスの「新大陸発見」に始まる、「喰らう」アメリカ像を検討する。ヨーロッパから喰人と眼差されたアメリカはいわば否定的客体として登場するが、その象徴たるキャリバンが、シェイクスピアの研究史においてアメリカ起源と同定されるのは、意外にも一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての世紀転換期を待たなければならなかった。

続く第2節では、奇しくも上記世紀転換期に一致するが、一九世紀末ラテンアメリカの知識人が肯定的主体を獲得すべくおこなった、喰人表象をめぐる価値転倒を扱う。彼らが否定的にキャリバンと名指したのはじつに米国であり、ラテンアメリカは米国に「喰われる」客体と位置づけられたが、両者の関係は実際にはより複雑な様相を呈している。

現在、キャリバンをポストコロニアル的主体と認識することは、ラテンアメリカが「喰らう」主体として自己肯定的したことを意味する。しかしながら、もし喰人表象をキャリバンに限定し

なければ、ラテンアメリカにはその先駆的段階があったことが浮かんでくる。それが第3節で取り上げる、1920年代ブラジルにおける「喰人宣言」にほかならない。

最後の第4節では、今日に至るポストコロニアル的主体としてのキャリバン像の広がりをも、ラテンアメリカをも越えたネットワークのなかに位置づけて考察する。

1. 「喰らう」ラテンアメリカ——コロンブスから「アメリカ学派」まで

喰人を意味する二つの単語、アントロポファギーとカニバリズムの語源について、ピーター・ヒュームは次のように記述している。

元来の語形は、食人行為を示す「カニバリズム」「アントロポファギー」ではなく、食人種を示す「カニバル」「アントロポファガイ」だった。しかし、それぞれの言葉の由来はまったく違っている。「アアントロポファガイ」はもともとギリシャ語で、すでにあった二つの言葉（人間を／食べる者）を合成して作られ、ギリシャ人が黒海の彼方に住むと想定した民族に付与された。「カニバル」の場合はこれと正反対である。それは、非ヨーロッパ名称で、アンティル諸島のカリブ族の一集団という実在の人々をさすものとして用いられた。この人々と食人行為とが結合され、もはや切り離しえない意味をもつ「カニバル」という名前がスペイン語（そして他のヨーロッパ各国語）に入っていた。のちに徐々に「カニバル＝食人者」という言葉が、「カリブ＝アンティル諸島の先住民」と区別されていった（ヒューム 1995: 19）。

このように、カニバリズムおよびカニバルは、そもそもアメリカ（カリブ海のアンティル諸島）に起源を持っている。先住民のカリブ族（carib）は、みずからの民族名がカニバルという名詞を生みだし、そのうえで、カニバリズムの風習を持つと逆に上書きされたわけであるが、そもそも、なにゆえアメリカは総じて喰人という表象を付与されるようになったのだろうか。

もちろんそれは、1492年のコロンブスによる「新大陸発見」に端を発している。コロンブスは、「顔に墨を塗り、体中にいろいろな色を塗り付け」、「頭髪を長く伸ばして、後ろで束ね、鸚鵡の羽根で編んだもので留めていた」裸の先住民男性を見て、「この男は人を食うカリブ族の一人に違いない」としたが、カリブ族＝喰人種とする判断は、「他で確認されたわけでもないコロンブスのこの想定以外に根拠をもたない」（ヒューム 1995: 53-55）。

とはいえ、この「誤認」はひとりコロンブスの責任に帰することはできない。落合一泰によれば、むしろそれは「ヨーロッパ中世末期の異人観・異郷観」の反映・投射といえる。当時、ヨーロッパにとって未知なる土地は、「無頭人、犬頭人、一本足、多腕人、単眼人などが跋扈する領域」とされていた。「なかでも「人食い」は、アメリカ大陸先住民をめぐる強いイメージのひとつ」（落合 1993: 5,13）であった。当時のこうした異人像は、「テンペスト」のなかにも名残を残

している。

ゴンザーロー [ナポリ王の老顧問官] 私どもが子どものころ／いったい誰が信じたでしょう、牡牛のように喉の皮が／垂れ下がり、それが肉の袋になっている／山の民とか、あるいは胸に／顔のついた人種のこととか？（シェイクスピア 2000: 111）

そして、異人の極みである喰人種を、「テンベスト」の登場人物として体現しているのがキャリバンである。それは、キャリバン (Caliban) がカニバル (cannibal) のアナグラムであるとの説に裏打ちされる (ヒューム 1995: 121,146; ヴォーン&メーソン 1999: 61)°。もっとも、物語のなかでキャリバンは、実際に喰人行為を働いているわけではない。喰人に類する行為があるとなれば、たとえばそれは、キャリバンによるミランダのレイプ未遂であろう。

プロスペロー 奴隷め、大嘘をつくな、／お前を動かすには鞭しかない、親身になっても無駄だ。／汚らわしいお前だが、人間として心を配り、私の岩屋に、／住まわせてやった。だが、俺の娘を犯そうとした、／だから追い出したのだ。

キャリバン お、ほう！ お、ほう！ とことんやっときゃよかったな！／お前が止めにはいらなきゃ、この島を／キャリバンっ子だらけにできたのに（シェイクスピア 2000: 40）。

未遂に終わったものの、プロスペロー＝植民者の所有物を略奪するという、形を変えた「喰らう」行為は、ヨーロッパにとってのアメリカ＝野蛮の潜在的脅威を示唆するに十分である。

アメリカ＝カニバル＝キャリバンとリンクして、キャリバンがアメリカの象徴であることは明白のように思えるが、シェイクスピア研究においてそうした見方が定着するまでには長い時間を要した。ヴォーンとメーソンによれば、「『テンベスト』の筋、言語、登場人物がヨーロッパによるアメリカの探検や植民と結び付けて考えられ始めたのは、一八世紀も末になってから」のことであり、「シェイクスピア学者のなかに、キャリバンがシェイクスピアによるアメリカ先住民の描写であるとはっきり主張するものが現れたのは、一九世紀も末になってからである」。彼らは「アメリカ学派 (American School)」と呼ばれ、その代表的人物にシドニー・リー (Sidney Lee, 1859-1926) やフランク・M・ブリストル (Frank M. Bristol, 1851-1932) がいた (ヴォーン&メーソン 1999: 170,173,175)。

リーは『ウィリアム・シェイクスピアの生涯』(1898)のなかで、「キャリバンは、新世界の土着の野蛮人を類まれな厳密さと鮮明さをもって描いた、想像上のポートレートである」(Lee 1906: 257)と記している。同様にして、ブリストルは『シェイクスピアとアメリカ』(1898)のなかで次のように述べている。

キャリバンの見かけは、ひとや動物などさまざまな形状の組み合わせ、なかでもアメリカ先住民、とりわけカニバルたる先住民もしくはアントロポファガイであることを示唆している。／シェイクスピアがキャリバンの人物像を描くにあたって……彼の心中にアメリカ先住民のことがあったのは疑いえない（Bristol 1971: 50-51）。

こうしてキャリバンのアメリカ由来はようやくにして確認されたが、それは同時にアメリカが、一九世紀末に至るも依然として野蛮な先住民の空間として、否むしろ、この世紀転換期に至り、プリミティヴィズムを求める西欧の視線の欲望の対象として、あらたに眼差され始めたと思わせるに足るものがあるのではないか。

リーとプリストルの著書は同じ1898年に刊行されたが、奇しくもこの年には、ラテンアメリカの地において「キャリバンの勝利」と題された掌編が世に問われている。しかし、そこでキャリバンと名指されているのは、アメリカはアメリカでも、ラテンアメリカに対する米国のことであった。

2. 「喰われる」ラテンアメリカ——キャリバン化する米国に抗して

(1) 物質主義の脅威

ラテンアメリカにとって1898年という年は、コロンブスの「新大陸発見」、一九世紀前半の植民地独立運動に次いで、非常に重要な画期をなす。スペインからの政治的独立は1898年の米西戦争（その実質からいって、米西キューバ戦争と呼ばれるべきである）によって事実上完了したといえる。スペインに代わって台頭してきたのが米国であった。当時のラテンアメリカの知識人は、スペインから精神的・文化的にも自律すべく、詩の創造的刷新を中心としたモデルニスモ運動を展開していたが¹⁰、この潮流は対米国を意識した政治性も帯びざるを得なかった。ニカラグア出身のルベン・ダリーオ（Rubén Darío, 1867-1916）はモデルニスモを代表する詩人であるが、「キャリバンの勝利」を著したのはほかならぬこのダリーオであった。

今福龍太は、従来のヨーロッパからの視線ではない、「＜アメリカス＞の文脈におけるキャリバンの登場はこのダリーオのエッセイをもって嚆矢とする」（今福 1998a: 20）と述べている¹¹。すでに指摘したように、「キャリバンの勝利」においてキャリバンとされているのは、もはやアメリカではない。この時点でアメリカは、ラテンアメリカと米国とに明確に二分され、キャリバンはラテンアメリカに脅威を及ぼす存在としての米国とされたのである。ダリーオによってキャリバン化された米国は、以下のように描かれている。

いやだ、私は銀の歯をしたバッファローたちの仲間にはなりたくない。彼らは私の敵、ラテンの血を嫌う者たち、野蛮人^{バルバロイ}なのだ。／私はそんな「ヤンキー」たちを、鉄と石でできた、ひとを圧倒させるような都市で見たことがある。彼らのなかで暮らすあいだ、

私はほんやりとした苦痛を覚えながら過ごしていた。山に押し潰されるような感じで、キュクロペス [ギリシャ神話に登場する単眼の巨人たち] の国で息をしている気分だった。キュクロペスとは生肉を喰らう者であり、獣のような鍛冶屋であり、マストドン [巨大古生物の一種] の家に住まう住民である。赤ら顔で鬱陶しく、粗野な彼らは、威勢よく押し合いへし合い体をぶつけ合いながら、「ドル」狩りへと出かけてゆく。彼らキャリバンたちの理想は証券取引所と工場に限られている。大いに食べ、計算し、「ウイスキー」を飲み、そして巨万の富を築く (Darío 1982: 85)¹²。

この描写から端的にうかがえるのは、「バッファロー」・「野蛮人」・「キュクロペス」・「マストドン」と野蛮なイメージを重ねられた末にまさに「キャリバン」と名指された米国が、貪るように物質主義（「鉄と石」の都市）・拝金主義（「証券取引所」）・生産主義（「工場」）・功利主義（「計算」）を実現してゆく様である。「生肉を喰らう」や「ドル」狩りはまさに喰人を彷彿させるイメージである¹³。

こうした米国の脅威に晒されているラテンアメリカの側の象徴が、「ラテンの血」である。ダリーオは、アングロサクソンの米国に対してラテンアメリカを擁護する代表人物として、アルゼンチン人のロケ・サエンス・ペーニャ (Roque Sáenz Peña, 1851-1914)、アルゼンチン在住フランス人のポール・グルーサク (Paul Groussac, 1848-1929)、そしてキューバ独立運動の指導者であるホセ・マルティ (José Martí, 1853-95) の3名の名を挙げ、彼らの主張から米国に対抗しうる原理を導き出す。それは、旧宗主国スペインさえも含んで「われらが民族 (raza) はひとつになるべきである」 (Darío 1982: 88) という自覚であり、その連帯の中核に置かれるべき「高潔、理想、高貴 (Idalgüía, Ideal, Nobleza)」 (Darío 1982: 89) といった精神性 (espíritu) の強調である。この精神性が米国の物質性に優るといっているのである¹⁴。

キャリバンが米国にたとえられたとして、一方のラテンアメリカはどのようなだろうか。ダリーオは「キャリバンの勝利」の末尾で、「ミランダは常にエアリエルのほうを好むだろう」 (Darío 1982: 89) と記している。ラテンアメリカは空気の精エアリエル (=エアリエル [スペイン語]) になぞられたのであった。ダリーオはこのことを示唆するに留めたが、これを受けてラテンアメリカ=エアリエルを全面的に展開したのが、ウルグアイのホセ・エンリケ・ロドー (José Enrique Rodó, 1871-1917) の『エアリエル』(1900) である。

(2) 精神性の逆襲

『エアリエル』の出版以降、スペイン系アメリカ人にとって、ロドーに触れることなく『テンペスト』に思いを致すことはむずかしくなった」 (Brotherston 2000: 212) といわれるように、ロドーの『エアリエル』が当時のラテンアメリカにおいて持った影響力は非常に大きかった。『エアリエル』は、プロスペローと呼ばれる老教師による若き教え子たちに対する講義の形式を

とった作品である。そのなかで、ロドーがラテンアメリカを委ねようとしたエアリエル像は以下のようなものである。

教室には、真剣な雰囲気をつかさどる守護神のように、『テンペスト』のエアリエルをかたどった優雅なブロンズ像がそびえていた。……／空気の精エアリエルは、シェイクスピア作品の象徴のなかで、高貴で軽やかな精神性（espíritu）を代表している。非合理性という次元の低い刺激を、エアリエルは理性と感情をもって統治する。エアリエルの熱情は寛容さを湛え、その行動は志高い無私の動機に彩られ、文化的精神性は高く、知性は活気と気品に満ちている。エアリエルはまさに選ばれし者たちが目指すべき理想である。優れた者のうちにも根強く残る、情欲と愚鈍さのシンボルであるキャリバンの名残を、生命溢れる^{ながわ}鑿を辛抱強く当てることで振り落とすのだ（Rodó 1991: 39-40）。

一方、ここでは必ずしも明示されているわけではないが、「情欲と愚鈍さのシンボルであるキャリバン」が「喰人」を思わせ、かつ、米国を指しているだろうことは十分明らかである。しかしながら、そもそも『エアリエル』において、キャリバンは数えるほどしか登場しない。『エアリエル』の主人公はあくまでもエアリエルなのである。さらに注意深く読み込むと、ダリーオが米国に対して明らかに否定的であったのに対して、ロドーはむしろ、ラテンアメリカと米国の融合を意識していたことが読み取れる。

アメリカは、そもそもの成り立ちのときから持っている二元性を、いまま維持する必要がある。二羽の鷲がそれぞれの支配領域の境界に同時にたどり着くよう地球の二つの極から同時に放たれたという古い神話があるが、この二元性がその神話を歴史の現実としたのであった。こうして肩を並べた素晴らしき二つの相違は、団結し融合に至るのを阻むのではなく、多くの点で寛容でむしろこれを促す。もし遠い将来の高次の融合のあり方をわれわれの時代から垣間見ることができるとすれば、それは一方の民族による他方の「一方的な模倣」によるものではなく——と、タルド [Gabriel de Tarde, 1834-1904。フランスの哲学者] ならいうだろう——、双方が互いに影響を及ぼし合い、それぞれの栄光を支えてきた持ち味をうまく調和させたものであるだろう（Rodó 1991: 114）。

もちろん、「団結し融合に至る」にあたって、ロドーがラテンアメリカの精神性の側にイニシアティヴを与えようとしたことはいうまでもない。ただし、その場合期待されたのは、「ロドーは、ヤンキーの文化がスペイン系アメリカとの融和が起きる前に飲み込んでしまうことを恐れていた」（ヴォーン&メーソン 1999: 205）という状況を踏まえれば、キャリバン＝米国によって物質主義的にラテンアメリカが飲み込まれてしまう以前に、エアリエル＝ラテンアメリカのほうが

精神性をもって米国を飲み込んでしまうことであった。ここに至り、ラテンアメリカによって、喰人の表像がはじめて主体的かつ肯定的なものとして担われたのである。

エミール・ロドリゲス・モネガルは、ロドーが「1912年に書いた何本かの政治コラムに「キャリバン」のペンネームで署名している」ことを引きつつ、「キャリバンが「われらのアメリカ」[ラテンアメリカを指す]のシンボルとして使われるようになることを予期さえしていた」(Rodríguez Monegal 1978 on WEB)と述べている。それは、今福の解釈によれば以下のような意味を持つ。

ロドーの深い読解は、北米というキャリバンをラテンアメリカの他者として排除するのではなく、他者が自己をつねに規定し直す弁証法的な関係性のなかに、キャリバンとアリエルとを位置づけることを私たちにうながすことになる。……/ロドーの提示したアリエルという理想形象のなかに、あらかじめキャリバンは棲息していた。自己規定が他者性を疎外するのではなく、他者性あるいは代替可能性のなかにこそ自己意識の核心がひそんでいるという、現代の私たちが手に入れかけている接続的なアイデンティティの思想に、『アリエル』は先駆的に立ち向かおうとしていたからだ（今福 1998b: 37）。

「はじめに」ですでに触れたように、現在主流のキャリバン解釈は、ラテンアメリカにとって肯定的なポストコロニアル的主体としての位置づけである。エアリエルがじつは主体的かつ肯定的な喰人像を引き受けたことによって、ロドリゲス・モネガル、そして今福が指摘するように、エアリエルとキャリバンは今日の意味において重なりうるのであった。

とはいえ、ロドーの知的エリート主義はやはり批判されなければならない。「ロドーのオプションから決定的に漏れていたのは、一つにはインディオ文化という先住民アメリカの遺産への考察だった。あるいは大西洋的な関係として植民地ラテンアメリカを根元から規定することになった、アフリカの文化の離散と定着だった」（今福 1998c: 41）。シェイクスピア研究の「アメリカ学派」はアメリカを先住民に限定してしまったが（第1節）、ロドーは逆に、先住民そしてアフリカ系黒人の要素を『アリエル』のなかから一切消去してしまった（あるいは、考慮すべきであるとの意識をまったく欠いていた）。アメリカの土着的要素および奴隷制の遺産を欠いたエアリエルは、いかに肯定的主体に位置づけられようとも、「[エアリエル自身は]与り知らない」プロスペローの「計画」（Rodó 1991: 154）にしたがっているに過ぎなかった。このプロスペローの立ち位置こそ、ラテンアメリカと米国の二項対立をも超越して存する、西欧中心の知的エリート主義にほかならない。そして、『エアリエル』に登場する老教師の渾名はじつにプロスペローだった（!）のであり、そこにロドー自身の姿も二重写しに見えてくるのである。

このように、ロドーの『エアリエル』とポストコロニアル・キャリバンとは、今福が示唆するほどに一足飛びには結びつかない。むしろ以下では、ポストコロニアル・キャリバンに至るいわ

ば前提として、キャリバンからは一旦離れ、ラテンアメリカの土着性を主体的に受け止めた1920年代ブラジルの「喰人宣言」へと迂回してみることにしたい。

（以下、後編に続く）

- 1 本稿は、平成16-19年度科学研究費補助金・基盤研究B2・研究課題「暴動する反近代としての〈過剰な食〉—規範の逸脱をめぐる複合文化学研究—」（福田育弘 [研究代表者]、神尾達之、桑野隆、後藤雄介、高橋順一、原克）の助成による成果の一部である。
- 2 ここでいう「アメリカ」とは、一般の了解とは異なり、アメリカ合州国（合「衆」国とも書かない。そして以下、単に「米国」と記す）を一義的に意味するものではまったくなく、植民地経験を共有する総体としてのアメリカ大陸を表す単語としてまずは使用される。さらに、行論の関係上、覇権国化した米国はむしろ除外され、アメリカは現在ラテンアメリカに相当する地域と事実上同義にさえ用いられることを、あらかじめ了解されたい。
- 3 「テンベスト」は、実弟の陰謀でミラノ大公の地位を追われ孤島に流されたプロスペローが、空気の精エアリエルと奴隷キャリバンを従属させつつ、一人娘ミランダを手塩にかけて育てながら、やがて来る復権を夢見、ナポリ王の息子と自分の娘を結び合わせることで、ついにその夢を実現させる物語である。
- 4 たとえば日本では、1998年に本橋哲也を中心に脱領域的ワークショップ「歴史の中の『テンベスト』」が組織された。その成果刊行が待たれる（人文書院から刊行予定）。ワークショップの概要については本橋 1998を参照されたい。また、成果の一部は以下のウェブサイト上で閲覧することができる（<http://www.inscript.co.jp/tempest/tempest%20index.htm>）。
- 5 こうしたシェイクスピアをめぐる批評のあり方について、河合祥一郎は「『嵐』の後のうるささ」（河合 2000: 175）と表現しているが、ここには明らかに否定的なニュアンスが含まれている。河合は続けて「そうした問題点ばかりを強調しすぎては作品を十二分楽しむことができない」（河合 2000: 177）と述べているが、なにをどう「楽しむ」かは作品の内在的価値というよりも読者側の判断の問題であり、その読者が多様でありうることを認めない不寛容な態度であるといえる。「ミランダの純真さを無視して、抑圧や不正に満ちた世界の問題点をあげつらってみせるのは不粹というべき」（河合 2000: 178）と述べていることに対しては、それは「純真さ」とは別に問われるべくして問われることであり、そもそも、その「純真さ」もなにゆえ可能であったかが問題化されてもよいのではないかと、「不粹」な応答を返すほかはない。
- 6 メスティーソ（mestizo）は、本来は先住民インディオとスペイン人の混血者を指すが、混血者全般をも意味する。ラテンアメリカの混血性＝メスティーサヘ（mestizaje）は、国民統合のイデオロギーとして機能する一方で、逆に文化の複合的可能性のシンボルとして位置づけられたり、さまざまな立場が抗争する非常にクリティカルなトピックである。詳しくは、後藤 1998を参照されたい。
- 7 ポストコロニアル・シェイクスピア研究は夥しい。本稿（前編）の議論には必ずしもその内容を反映できなかったが、以下のような文献も参照している（Barker, et al., eds. 1998; Dollimore & Sinfield, eds. 1985; Goldberg 2004; Hulme & Sherman, eds. 2004, Joseph 1992, Loomba 2002; Loomba & Orkin, eds. 1998; Zabus 2002）。
- 8 キャリバンの語源はカニバルではなくカリブ族のほうであり、「シェイクスピアはキャリバンを新世界の住民としただけで、必ずしも食人種を意味したわけではない」との説もある。アメリカ起源以外にも、キャリバンの語源については諸説ある（ヴォーン&メーソン 1999: 61-71）。
- 9 キャリバンおよび「テンベスト」のアメリカ文脈での解釈が一九世紀末に確立した背景に西欧のプリミティヴィズムを見るのはいまだ仮説に過ぎず、今後更なる検証を必要とする。しかしながら、「当時のイギリスとアメリカ合州国とが文化的にも政治的にも協調体制にあったという事情に支えられていた」（ヴォーン&メーソン 1999: 177）との説明に対しては、あまりにも二国間的で閉鎖的であると断じたい誘惑を禁じえない。
- 10 ラテンアメリカのモデルニスモについては、とりあえずジーン・フランコを参照されたい（フランコ 1974: 15-48）。
- 11 今福のこのエッセイは、『ちくま』誌上で連載された〈シェイクスピアと“Americas”〉の最初を飾るものである。連載は1999年334号で中断されるまで続いた。本稿と深く関わる内容を含んでおり、非常に示唆に富む。連載の再開、もしくは刊行物化に期待したい。なお、この連載は今福が主催するウェブサイト上でも閲覧可能である（<http://www.cafecreole.net/archipelago/Americas/index.html>）。

- 12 引用は基本的に拙訳だが、柳原孝敦から提供された未刊行の試訳も大いに参考にした。記して感謝する。
- 13 このほか、「テキサスを飲み込んだのちもまだ開かれている大蛇の下顎」[1845年にメキシコよりテキサスを併合した米国を示唆]、「ひとを生きのまま喰らおうとするこの男」(Dario 1982: 86,87) などの記述が見られる。
- 14 柳原孝敦によれば、米国に対してラテンアメリカが精神性において優れているという主張は、マルティが「コニー・アイランド」(1881) と題されたエッセイのなかですでに明示的に語っていた (柳原 2000: 109-113)。

文献

- Barker, Francis; et al., eds. 1998. *Cannibalism and the Colonial World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bristol, Frank Milton. 1971 [1898]. *Shakespeare and America*. New York: AMS Press.
- Brotherston, Gordon. 2000. "Arielismo and Anthropophagy: *The Tempest* in Latin America". Peter Hulme; William H. Sherman, eds. *"The Tempest" and Its Travels*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Dario, Rubén. 1982 [1898]. "El triunfo de Calibán". *Prosas políticas*. Managua: Ministerio de Cultura.
- Dollimore, Jonathan; Alan Sinfield, eds. 1985. *Political Shakespeare: New Essays in Cultural Materialism*. Manchester: Manchester University Press.
- Fernández Retamar, Roberto. 1989. *Caliban and Other Essays*. Edward Baker, trans. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- フランコ, ジーン 1974. 『ラテン・アメリカ-文化と文学——苦悩する知識人——』(吉田秀太郎訳) 新世界社
- Goldberg, Jonathan. 2004. *Tempest in the Caribbean*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 後藤雄介 1998. 「混血文化論をめぐる一考察——「メスティサヘ」の位置づけを手がかりに——」『論集』(青山学院大学) 39号
- Hulme, Peter; William H. Sherman, eds. 2004. *William Shakespeare: The Tempest*. New York: W. W. Norton & Company.
- ヒューム, ピーター 1995. 『征服の修辞学——ヨーロッパとカリブ海先住民, 1492-1797年——』(岩尾龍太郎, 正木恒夫, 本橋哲也訳) 法政大学出版局
- 今福龍太 1998a. 「ある「誤読」の二〇世紀史・序説」<シェイクスピアと“Americas”> 『ちくま』 326号
 —— 1998b. 「アリエル, あるいは家族的闘争——パスから, ダリーオ, ロドーへ——」<シェイクスピアと“Americas”・2> 『ちくま』 327号
 —— 1998c. 「命名の錯誤——ロドーから混血の学徒たちへ——」<シェイクスピアと“Americas”・3> 『ちくま』 328号
- Joseph, Margaret Paul. 1992. *Caliban in Exile: The Outsider in Caribbean Fiction*. New York: Greenwood Press.
- 河合祥一郎 2000. 「解説「嵐の後の静けさ」」シェイクスピア『テンベスト』<シェイクスピア全集・8> 筑摩書房 (ちくま文庫)
- Lee, Sidney. 1906 [1898]. *A life of William Shakespeare*. New York: The Macmillan company.

Loomba, Ania. 2002. *Shakespeare, Race, and Colonialism*. New York: Oxford University Press.

Loomba, Ania; Martin Orkin, eds. 1998. *Post-Colonial Shakespeares*. New York: Routledge.

本橋哲也 1998. 「翻訳と解釈の政治学——<テンベスト>をめぐって——」『未来』387号

落合一泰 1993. 「「アメリカ」の発明——ヨーロッパにおけるその視角イメージをめぐって——」『ラテンアメリカ研究年報』13号

Rodó, José Enrique. 1991 [1900]. *Ariel*. Madrid: Espasa Calpe. [2002. 「アリエル」(抄訳) レオポルド・セア編『現代ラテンアメリカ思想の先駆者たち』(小林一宏, 三橋利光訳) 刀水書房]

Rodríguez Monegal, Emir. 1978. "Las metamorfosis de Calibán". *Vuelta*, vol.3, no.25. =<http://mll.cas.buffalo.edu/rodriguez-monegal/bibliografia/prensa/artpren/vuelta/vuelta_25.htm>

シェイクスピア 2000. 『テンベスト』<シェイクスピア全集・8>筑摩書房（ちくま文庫）

ヴォーン, アルデン・T, ヴァージニア・メーソン・ヴォーン 1999. 『キャリバンの文化史』(本橋哲也訳) 青土社

柳原孝敦 2000. 「街灯, 吊り橋, 鉄塔——ホセ・マルティ, 文化の生産装置——」『法政大学多摩論集』16巻

Zabus, Chantal. 2002. *Tempests after Shakespeare*. New York: Palgrave.